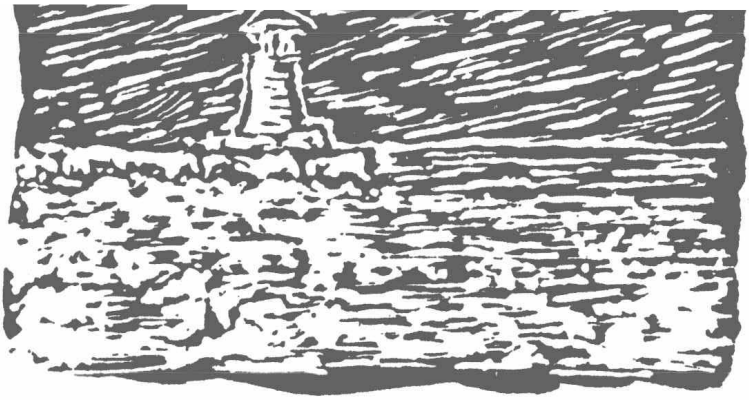
流水の街

流氷の街

南部きみ子



中央公論社

流氷の街

著　者　南部きみ子

昭和34年12月20日印刷
昭和35年1月10日発行

発行者　栗本和夫
印　刷　共同印刷

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋2ノ1
電話(56)5921～30番
振替・東京34番

定価230円

検印廃止

目次

流氷の街　3
ある自殺　87

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

流氷の街

空は一瞬の静止もなく動き続けていた。驀進する汽車を境にして、重く曇った左手の原野は、横なぐりの霙に打ち叩かれているのに、右手の山脈はプラチナ色の陽光を燦々と浴びて、透明な北国の青空に頂きの白雪をきらめかせている。

しかし、大きくカーブした汽車が山を後に根釧原野の中心へ直進しはじめたとたん、乗客の視界は一変した。大虎杖と穂芒の波を強風にざわめかせる原野全体が、黄昏の海原のような暗さに沈んだ。散在する落葉松と白樺の森林は、巨大な岩礁を思わせて黝み、枯れ果てている。そしてもう、霙は止んでいた。

中川静江は、覗きこんでいた窓から体を引きはなすと、目を閉じて座席の背にもたれかかった。生まれた土地——東京——からほとんど外へ出たことのなかった四十三歳の女にとって、初めて接する北海道の自然はあまりに厳しすぎる。大味で陰欝な窓外の風景は、一昨夜上野をたって以来、四十時間近くも汽車に乗り通している彼女の身心を、押し潰すような巨きさで迫って来たのである。

スチーム代りに燃えている地球儀型の車内ストーブの周りでは、ゴム長をはいた土地の男た

ちの世間話がはずんでいた。終着のN駅まであと二時間かかるはずだが、函館からの長距離列車のせいか、小樽、札幌、帯広、釧路等の主要駅でごっそり客がへり、いまは数えるほどの乗客しか残っていない。火気に追われて流れてくる男たちの体臭の中から、如何にも最涯の土地らしい、魚臭、木の香、煤煙の匂い、といったものを嗅ぎわけていると、静江の心はわびしい落魄感に浸された。

娘夫婦は、母が都落ちした後のわが家で、さぞのんびりと、二人きりの新婚生活を愉しんでいるであろうと想像すると、静江の心は深い焦慮と孤独感に責められた。と、不意に背後から「そりゃァ彼は・・・」「何と言っても瀬山は大物だ・・・」という言葉の切れはしが静江の耳に飛びこんで来た。彼女はとっさに身を起して、その会話の内容を探ろうと努めたが、あいにく大分席がはなれていて、あとは「N市じゃ何と言っても瀬山が・・・」「来春の選挙にゃ・・・」というふうな言葉が断片的に聞きとれるだけだった。

N市の瀬山――それは、彼女がこれからたずねて行って、十数年ぶりに再会する男と同姓だったのである。戦災未亡人である静江は、亡夫の又従兄弟にあたる瀬山に懇望されて、彼の経営する養老院の寮母に就任すべく、東京からやって来たのだ。

密談にでも移ったのか、背後の声は急に消えた。静江は声の主達がこの前の駅で乗りこんで

来た黒いベレーの青年と茶のソフトの五十男であるらしいと知り得ただけで、ふたたび目をとじた。

汽車は夜に入ってN駅に着いた。静江は降り際に例のベレーの青年の脇を通り、彼が「北洋タイムス社」と印刷したハトロン紙の書類封筒を手にしているのを認めた。齢は二十七、八であろうか。貧相な浅黒い皮膚に、太い黒縁の眼鏡と都会風？な帽子が小生意気な印象で静江の反感をそそった。

これも、うちの婿と同種族の人間か――と静江は思った。彼女は、女手一つで育てあげた娘を母から奪った男を憎んでいた。婿と同じ年恰好の青年たちを眺めるたびに、静江の心は見捨てられた母の怨詛で疼くのである。

駅には瀬山の命をうけて、黒い皮ジャンパーの老爺が彼女を迎えに出ていた。彼は、茶の合オーバーに青いスーツケースを提げて改札口を出て来た静江を、一目でそれと判断したらしい。いきなり傍へ来て言った。

「東京から来なした光明園の寮母さんだかね？」

静江は頷いた。彼が差し出す手に荷物を渡しながら、ふっと先刻の青年を思い出して後をふり向いた。すると、黒いベレーは売店で買物をしている連れを待ちながら、じっと静江の方を

眺めているのである。互いの視線が合うというには、間に距離がありすぎるが、意外なことだったので彼女は狼狽した。

「方丈さんは、ちょっと取込事ができて、法務局のお役人と話し合ってるで、出迎えに来られねえと」

老爺の言葉に促されて、静江は慌てて青年に背を向けた。

瀬山も、彼の妻も、遠来の自分のために駅に姿を見せようともしない——。静江の心に漠然と拡がった不安と失望は、老爺にしたがって夜の街へ歩み出した瞬間から、いっそう深まっていった。

人口三万二千の小市とは聞いていたが、それにしても辺りは余りに暗く、人間の音がなさすぎた。大通りの両側に旅館や商店が並んでいることは、そこの硝子戸から僅かに道路へさしている黄色い光で察せられる。だが、どこを見渡しても、街灯らしいものは一本もなかった。漆黒の夜空は驚くほど大きい星くずを明滅させて、巨大なドームのように頭上にかぶさり、一切の物音を吸い取ってしまっている。

東京の下町に生れ育って、一晩中絶えることのない音と光の生活きり知らぬ静江には、この雰囲気は珍しさを通りこして異様だった。静江は「死の街」へ来たかのようなN市の第一印象

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

におびえて、思わず足をすくめた。

まだ宵の口なのに潮っぽい十一月の空気にさらされて、舗装されていない道路は半ば凍りかけていた。

瀬山が住職を勤める光明寺の裏門は、駅から五分ばかり歩いて、海岸へ下る坂の途中にあった。木戸を通るとすぐ右手が、庫裡と棟続きの総合事務所のドアになっている。彼は市内に三百軒近い檀家を持つ光明寺の住職であるほか、社会福祉法人「光明園」を経営する養老事業家なのである。と同時に、養老者、身体障害者を収容し、あわせて一般の外来患者をも受けつける光明園病院の院長で、保育園、高等学校の経営者であり、現職の市会議員でもあった。

静江が事務室へ入って行った時、和服姿の瀬山は、部下達に帳簿や書類を拡げさせて、三十四、五の男二人に、光明園の経営内容を熱心に説明していた。彼は、静江に軽く会釈し、そこへ腰かけて待て、というふうに隅の椅子を目で示すと、すぐに相手の方へ向きなおった。静江は客が、先刻老爺からきいた、法務局の役人であることを納得した。

静江は目の前の小テーブルに置き放されているタブロイド判の新聞に、北洋タイムスという社名を見出して、黒ベレー帽の青年を思い起したが、「養老施設光明園の恐るべき内幕」という大見出しに吸いつけられた。ふた月ほど前の老人の日——九月十五日の発行日付をもつ、そ

の古新聞は、光明園収容者の投書をもとに、瀬山の養老事業の内幕を散々に暴露し、叩いているのだった。

「北洋タイムスは、私が慈善事業によって私腹を肥しているかの如く書きたてていますが、これまでの説明で、そんなことは、明らかに不可能なのを、よく解っていただけたと思いますがな」

と瀬山は言った。彼は新聞記事の真偽をたしかめに来た役人に、それが根拠のない捏造記事に過ぎないと力説しているのである。光明園は、百五十人の老人と、十人の精神薄弱者を収容しているが、戦前は、瀬山の私財によって設立、運営されていた。しかし戦後の経営はほとんど、生活保護法の委託費に頼っているので、そこに第三者の悪質な中傷を誘う、危険な落し穴があった。つまり、収容者一人当りの経費を、公の機関から支給される委託費より安くあげれば、その差額が瀬山個人の利益になる、というわけなのだ。

五坪ほどの板の間には、石炭ストーブの暖気が充満していた。静江の疲れた軀は次第に柔かくほぐれて来たが、同時に椅子からずり落ちそうな睡魔に襲われはじめた。とんだ時にここへ着いたものだ、という思いと、新しい職場への不安を嚙みしめながら、彼女は眠気ざましの意味もあって、自分の注意力を、この場のなりゆきに集中させようと必死に努めた。

この事件の発端は、光明園の養老者の投書にあった。Mというその老人は、戦死した息子の遺族扶助料が、一ヵ月二千九百円もらえる。しかし光明園にいる以上、その金はすべて瀬山の金庫に入れられてしまい、彼自身には一銭も渡されない。Mは「扶助料から食費を差引いた残金を、たとえ僅かでもいいから、自分の小遣銭として、もらえないだろうか。光明園は待遇が悪くて、自分は月二千九百円あたいのものを食べさせてもらっているとは、どうしても考えられない」と言っている。

北洋タイムスは、Mのこの投書を、光明園の食事が悪い、部屋がせますぎる、病気になっても薬も満足にくれない、園長は養老事業で金儲けをしているなどの、瀬山への攻撃に発展させていた。

これに対して瀬山は、法律は最初から、一人の人間が、同時に二種類の扶助金を国家から受けることを禁じているし、Mの言い分は大きな誤りを犯している、と、詳細な数字をあげて反駁した。

N市における六十歳以上の老人の生活保護費は、一月大体、男千八百円、女千七百円だが、光明園では一人あたり食費二千百十五円、事務費その他千九百円、計四千十五円の経費をかけている。結局毎月一人当り二千二、三百円の赤字が出ていることになる。その赤字分が一般篤

志家からの寄附や、年末に配分される「赤い羽根」の募金（数十万円）で補われれば、経営者の苦労はないのだが、そうはうまくいかない。常に瀬山が多額の赤字を背負いこまなければ、光明園の不幸な老人達は餓死しなければならない。

Mの場合も、彼の遺族扶助料二千九百円は、実際には、それから生活保護費千八百円を差引いた、千一百円しか支給されていない。これを彼の一月分の経費に充当しても、まだ千百十五円の赤字がのこるのだ。まして、生活保護法第八条には、

「保護は、……その者の金銭又は物品で満たすことのできない不足分を補う程度において行うものとする」

「前項の基準は、要保護者の……保護の種類に応じて必要な事情を考慮した最低限度の生活の需要を満たすに十分なものであって、且つ、これをこえないものでなければならない」

とうたわれているのである。光明園で一応過不足のない衣食住を与えられているMが、同じ環境にいる仲間をさしおいて、自分だけ小遣を要求するのは、贅沢すぎるというものだった。

読経できたえた瀬山の声は、肥満した六尺豊かの体軀にふさわしく、六十五歳の老人とは思えぬ艶とボリュウムがあった。娘のように厚く脂づいた瞼の下で、和やかに細められた茶色の眸は、話しの合間にぐっと見開かれると、びっくりするほど大きくなった。

役人達は、瀬山の言葉に頷きながら、この辛気臭い話しに明らかに倦み疲れた様子をみせていた。瀬山に説明されるまでもなく、国家がくれる、千七、八百円の金で、いまどき人間一人、一ヵ月生命がつなげるとは誰も信じていはしない。しかし現実はその不可能事を可能にしているために、今度のような事件が引き起されるのだ。と言って、この場の話だけで納得すれば、瀬山自身に罪のありようがなかった。

静江は、役人達が窓ごしに境内の闇を眺めて、ふっと空腹に耐えかねた表情を見せたのに気づきながら、夫に爆死された後の自分が、光明園の収容者達と大差ない、ぎりぎりの貧しさで、生活と闘って来たことを思った。もうとうに若さを失った身で月一万円の月給に惹かされ、最涯のこの地にやって来た自分の孤独さも、彼らとそれほど変らないはずだ、という気がした。

瀬山は、この場の空気を敏感に捉えていた。

「この辺でちょっと一休みなさいませんかな。午後からずっとのことじゃて、お疲れになりましたろ。家内の手料理で食事していただいて、残りのお調べはまたその後にでも・・・・」

彼の言葉に、役人はほっと表情をゆるめて、女事務員が差出した番茶に手をのばした。

瀬山は初めて真正面から静江と向き合って言った。

「御主人が亡くなられてから、あんたもえらく苦労されたらしいが、ここへ来りゃ、もう安心

じゃ。食うことにも寝る所にも、ちっとも不自由することァない。ところでいまのさわぎの原因は、あんたにも大体推察できたじゃろ。日本という国がここで行き止りになっとるせいか、この街の連中は尻の穴の小さい奴ばかりよ。東京者のわしが、僅かに二十年足らずでこれだけの事業をやり遂げたのをやっかんで、地元新聞に中傷記事を書かせよった。大方、来春の市議選挙を控えて、反対派の連中がわしの再出馬を妨害するつもりなんじゃろ。それに、光明園みたいな施設には、全国どこの場合でも、今度のような事件のもととなる訴訟狂、投書狂がかならず二、三人はいる。ところが、この半気違いの言動が、往々にして悪意の第三者に利用されるので、わしら養老事業家には、いつも頭痛の種になっとるのよ」

こぼしてはいるが、彼はきめの細い色白の福相を、宗教家にふさわしいおだやかさに笑み崩していた。

「私みたいな者にこんな複雑なお仕事のお手伝いが勤まるかどうか、心配になって来ましたわ。私、法律とか政治には生来とっても無知な女なんですよ」

と静江は言った。わが身とひきくらべても、養老者たちの哀れさは十分理解できる。彼らのために出来るだけの働きはしたいとも思う。しかしそのために、条令や数字を勉強し、さらに瀬山自身の政治的バックも顧慮しなければ寮母の役がつとまらないとなったら、これはもう静

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com